

特集

島への定住と起業・I



全国の各地域で将来の担い手が減少しているいま、定住の促進が各島共通の喫緊課題であることはいうまでもない。とりわけ、地域コミュニティの中核となる若年層の移住定住に対する期待は大きい。

定住のためには、働く場と住む場が必要だが、島外からの企業誘致は容易ではなく、既存の就業先も限られている。空き家は多いが貸し手は少なく、公営住宅の整備もまだ決して十分とはいえない状況のなか、定住希望者自らによる新規起業や拠点づくりが求められている。

今日までに自力での定住を果たした人たちも多いが、例えば鹿児島県のある小規模離島自治体では、昭和五十年代から若手を対象とした定住対策事業を開始。就業支援や生活助成金支給、公営住宅の整備などの独自施策を実施し、島出身者やその血縁者を含むＵターンばかりではなく、積極的にＩターンを受け入れて成果が表れてきているケースも見られる。

また、国や地方自治体、各種関係団体でも、三十

年ほど前から、農林漁業の担い手育成、ふるさと回帰支援、移住体験ツアー、定住アドバイザーや空き家バンクの設置、ビジネスプランコンテストによる起業支援など、とりわけ若い人たちの活躍を促す支援事業を実施してきた。近年は「地域おこし協力隊」などの派遣制度も創設され、平成二五年施行の現行離島振興法でも目的条項に定住促進が明文化されるなど、ソフト支援施策が導入されるに至っている。

このほかクラウドファンディングの活用など、起業や活動資金の調達方法の多様化も島への移住定住の後押しにつながっている。

今号では、これらの各種支援施策も活用しながら島に定着し、花卉栽培や塩づくり、ガラス・革細工、カフェ経営、デザイナーやライター、島ガイド、映像制作などで地道に生計を立てているＵ・Ｉターンの方々に、定住のきっかけ、起業の苦労、将来構想、今後必要な支援施策などについて報告をいただき、また行政や住民など受け入れ側からみた定住者像についてもあわせて紹介いただいた。

- ① 島人とともに未来をデザインする 26
 (山形県酒田市・飛島)
 合同会社とびしま・デザイナー／Iターン 松本友哉
- ② 協働の島で若者たちの元気を取り戻す 32
 (愛知県西尾市・佐久島)
 若者自立支援団体 ONE STEP代表／Iターン 笠間 淳
- ③ 島の魅力発掘をなりわいに 38
 (兵庫県姫路市・家島群島)
 いえしまコンシェルジュ／Iターン 中西和也
- ④ 映画監督を目指し、映像制作で起業 44
 (島根県隠岐の島町・島後)
 Fourteen Creative Films代表／Uターン 西村 航
- ⑤ 商店とガラス工房の経営、育児を両立 48
 (広島県大崎上島町・大崎上島)
 大崎上島ガラス工房 Marble代表／Iターン 新本典子
- ⑥ [レポート] 草と塩で生計を立てる個性的な移住者たち 52
 (長崎県新上五島町・中通島)
 ライター／Iターン 竹内 章
- ⑦ 地域との信頼関係にもとづく農園経営 61
 (鹿児島県和泊町・沖永良部島)
 花卉農家／Iターン 遠藤仁司



島人とともに 未来をデザインする

合同会社とびしま・デザイナー／イターン 松本友哉

島で活躍するデザイナーを目指して

山形県の小さな離島、飛島に暮らして丸五年が過ぎた。

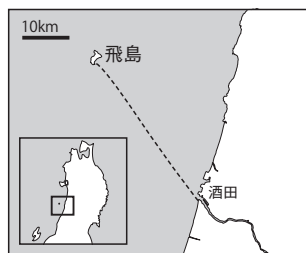
島の春は一年の大漁を祈願する祭りで始まり、ワカメやアラメなどの海藻が採られる。海上をトビウオが飛び始める頃から繁忙期の夏になり、多くの観光客が訪れ賑わいを見せる。お盆を過ぎ気温が徐々に落ち着くとともに島は静けさを取り戻し、日本海に北寄りの強い風が吹き始めると海は荒れ、閉ざされた冬をむかえる——。そんな島の生活が日常となった。

私の地元の山形県は、日本海と瀬戸内海に面しているが、実家は海から離れた山や田んぼに囲まれた場所にある。「なぜ山口から飛島に来られたのですか」と聞かれたことは数

え切れない。まさか自分が海に囲まれた生活を送ることに

なるとは、まったく想像をしていなかった。山口県の高校を卒業後、地元を離れて都会を経験したいと考え大阪の大学へ進学し、建築やデザインを学んだ。就職活動の始まる時期に東日本大震災が起こり、被災地にボランティアに行ったことでそれまで持っていた価値観が揺らいだ。

その後、高知県の山村に一カ月滞在したことで、田舎で活躍するデザイナーになろうという思いが固まり、まずは一年間じっくりと田舎を体験しようと考えて、「緑のふるさと協力隊」(若者が農山漁村で一年間の地域貢献活動を行う地球緑化センターの事業。平成六年開始)へ応募。大学卒業後、縁もゆかりも、逃げ場もない飛島で働くこととなった。



飛島：酒田港の北西約39kmの日本海に浮かぶ、標高68mの高森山を最高点とする平坦な島。面積2.7km²、周囲12km、人口205人(平成29年3月現在)。対馬暖流の影響で比較的暖かく、漁業と観光業が主産業。



春祭りでの猿田彦(天狗) 舞。

島で暮らしていくために合同会社を設立

飛島はまるで外国だった。まず言葉がまったく聞き取れない。最初の年、春のワカメ採りの作業中、左側に座ったおじいさんが低くかすれた声で何かを聞いてきた。一言も分らず黙っていると、右側に座ったおじいさんがそれを訳して伝えてくれた。しかし、それすらほとんど理解できず、三人は静かに作業を続けた。

私の移住と同じ時期、偶然にも島にはほかに三人の若者の姿があった。東日本大震災の影響でUターンをして家業を手伝うことになった本間当^{あた}、島外のNPOに所属して飛島の事業を担当していた渡部陽子、山形県東根市出身で大学在学中に飛島に通った小川ひかりである。本間と渡部の二人は飛島出身者。小川は卒業後に移住した。時を同じくして、それぞれのきっかけと立場を持って島に関わるようになった四人は、少しずつつながりを持つようになっていった。

ずっと島に住み続けるかどうかは別として、もう少し島にいたいと思う自分たちのような若者が島にいられる状況をつくりたい、仕事をつくりたい、という共通の思いのもと、平成二五年三月に「合同会社とびしま」を設立し、活動を開始した。

○次から三次産業まで手がける島の総合商社

合同会社とびしまは、第一次産業（生産）から第二次産業（加工）、そして第三次産業（流通・販売）までを総合的に



カフェペースしまかへ。

行う六次産業化を進めている。

一次産業としては、島の基幹産業である漁業に取り組んでいる。設立当初は漁師を手伝う程度の事業だったが、今年度からは新規漁業者の育成のために、漁師に一年間付ききりで漁業を学んでいる。平成三〇年度からは、会社の自立した事業として漁業を展開していく予定だ。

二次産業としては、元食堂を活用した小さな加工所を拠点に商品の開発や製造などの加工事業を行っており、主に島の伝統食である塩辛や焼き干しを製造している。

三次産業は、飲食事業である。島の港近くにある「カフェスペースしまかへ」や、本土側の「島の炭火焼きカフェ&バル炭かへ」で島の味覚を発信している。さらに、物販事業としてお土産屋やウェブショップの運営を行い、観光事業としてツアー企画や島内のガイド、遊覧船の運航なども実施している。

特徴的なのは、独自の概念として掲げている第〇次産業の取り組みである。〇次産業とは、各次産業の基盤であり、産業となりうる前の産業として「風景の保存・継承」と定義している。具体的な活動としては、自然事業として除草や除雪作業、海岸の清掃などがあげられる。また、歴史・文化事業として島の暮らしを写真・映像・聞き書きで記録し、アーカイブや展示などを行っている。加えて、生活・暮らし事業として簡易水道施設の管理業務や協議会・委員

会などの事務局業務なども担っている。

今年度は、業務執行社員（役員）で設立メンバーである四人と、後に加わった四人の合計八人、平均年齢二八歳の仲間たちによって会社を運営している。役員以外の四人の出身地は県内二人、東京都一人、栃木県一人といずれもＩターンである。まだまだ経済的に厳しい状況ではあるが、徐々に事業も拡大し、若者の雇用も増えつつある。

漁業を手伝いながら必要な「デザイン」を考える

会社の中で、私はデザインを主に担当している。ロゴマーク、チラシ、パッケージ、書籍、ウェブサイトなどさまざまなデザインを行っている。地域づくりをするときにデザインはとても重要だ。地域の潜在価値を理解し、効果的にレイアウトして正確に発信しなければ、どんなに美味しなものもどんなに面白いことも伝えることが出来ない。グローバルな事業に取り組む際に英語が最低限必要であることと同じように、デザインが地域の活性化に必要不可欠だということは今では一般的な認識だ。

飛島にデザイナーがいることに対し、島外から良い評価をいただくこともあった。しかし、島では室内でパソコンを前に行う仕事への理解を得ることは難しく、そもそもデザインという言葉自体が通用することが少ない。島の言葉を理解してコミュニケーションを取れるようになってから

もこの悩みは変わらなかった。これは私のデザインに対する考え方に大きく影響した。

例えば、漁師は、水揚げした魚を氷を敷いた発泡スチロール箱に並べ、蓋をして箱の側面に黒色のチョークで魚種や重量を記載する。忙しい時には、筆が荒く文字がつながっていることもある。積み上げられた箱は、漁協を通して本土へ出荷されて競りにかけられる。漁師にとってのパッケージデザインは、この発泡スチロールではない。しか



積み上げられた発泡スチロール箱。

し、仲買人がパッケージデザインを考慮することはなく、箱の中にある魚自体を吟味するだけだ。いくら魅力的な箱で装飾しても結果は同じだろう。

では、何をデザインするべきなのか。もしかするとデザイン作業に必ず使用しているパソコンでさえ、必要ではないのかもしれないと考えた。思考の末、今年度から島の漁師に習い漁業を始めることにした。陽に焼かれ波に揉まれて、日常になりかけていた飛島の生活が、再び新鮮で濃厚な毎日が変わっている。漁師の目線を知り、実際に体感することで、これから島に必要なデザインを生み出せると考えている。

新たなコミュニティの運営主体を目指して

島もまた、今、何をするべきなのか再考する必要がある。飛島は、現在二〇五人、平均年齢六九・二歳（平成二九年三月現在）と人口減少や高齢化が顕著に進んでいる。飛島の人口は昭和一五年の一七八八人をピークに減少が始まった。日本の人口減少は平成二〇年が始まりだと言われていることから比べると、島の人口減少の開始はとても早い。地域の消滅は目前に迫っている。

残りの時間や人数で出来ることは少なく、無駄な労力はかけられない。平均年齢から考えると、このままでは二〇年後に島人のほとんどがいなくなることは免れない。



「合同会社とびしま」のメンバー。下段中央が筆者。

合同会社とびしまは、二〇年後に一〇〇人の自治組織となることを目指している。人口減少と高齢化が急速に進む現代では、新たなコミュニティの形が必要とされている。その、コミュニティの運営主体は従来の地方自治体でな

行政からのメッセージ

◎島人の活気につながる「合同会社とびしま」

酒田市飛島は、近年、人口減少と少子高齢化が著しく、平均年齢は69.2歳（平成29年3月末現在）となっており、地域コミュニティの弱体化が深刻化しています。

また、飛島では、旅館・民宿などの観光業と漁業が主な産業となっていますが、後継者不足による規模の縮小、加えて、移住・定住者用の程度の良い空き家の不足などが喫緊の課題となっています。

平成23年当時、島には20歳代の若者が1人もいない状況であったため、島人が担えなくなった部分を補完するという目的で、特定非営利活動法人地球緑化センターに依頼し、平成24年度から「緑のふるさと協力隊」を導入しました。そこで派遣されてきたのが松本友哉君です。松本君は、1年間の協力隊の活動が終了した後もそのまま飛島に残り定住を決め、同じ時期にUターンやIターンしてきた若者3名と「合同会社とびしま」を設立し、島の歴史や文化を保存する活動から水産業、お土産品開発、インターネット販売、飲食店の運営、観光ツアーガイドなどのさまざまな活動を行っています。

今までにない若者たちの新しい活動に対して、島人からは厳しい声が聞かれることもありましたが、良い意味での張り合い、競争が生まれ、20歳代の若者が1人も居なかった頃に比べると活気が戻ったように感じます。また、若者が活動している姿を目にすること、若者と日常的に会話することなどが住民の生活の潤いになっているという声もあります。

そうした若者たちの活動には行政としても大変期待しているところであり、島の「総合商社」となって「社員＝島人」を増やしていただき、島の未来のため、活性化のため、そして自分たちのためにがんばっていただきたいと思っています。

今後の、若者を含めた移住・定住者の支援施策のあり方については、単純なお金や物の支援だけでなく、先に移住・定住した方々の声に耳を傾け、そうした生の声を反映した支援施策を考えていくことが何より重要だと思います。

（酒田市市民部まちづくり推進課 池田邦臣）

くてもよいはずだ。島の出身者かどうか、法人や団体の種類が何かなどはまったく関係ない。飛島の人々が協力して、将来どのように生きていくのかをデザインすることは、新

しい時代を切り拓くことだ。この可能性に満ちた小さな島で、私はこれからも暮らしていきたい。

松本友哉（まつもと ともや）

1988年山口県生まれ。大阪工業大学で建築やデザインを学ぶ。大学卒業後に山形県飛島に移住。飛島では合同会社とびしまの業務執行社員とデザイナーを務める。近年は個人としてのデザイン活動や漁師修行も行っている。